

實業之日本

二月十五日

特 載

決戰企業體制的躍進

帆足計・杉山清・森喜一

「決戰食糧」の確保

【座談會】

石坂弘 宮城孝治

吉植庄亮

農業増産への挺身

卷頭言

酒井忠正

生産の在り方考へ方に種々區別せねばならないものがあることは當然である。例へば工業のやうに生産資材の限界が極めて判然としてゐるものと、農業のやうにそうでないものとの場合では此の點著しい區別があり、精神の持ち方といふ様なものゝ齎す効果の點でも随分異なるものがあるのである。

農業は土地と太陽と雨、この消費し盡せぬ資源を對象とする産業である。しかもわが國の農業は家族労働を經營の規準とするものであつて、一人の農民が經營者であり、各種の技術者であり労働者とならねばならないのであるから、個人の精神力如何の影響するところ極めて大きく、増産に對する覺悟が生産高に及ぼす關係は歴然たるものがあるのである。

今日の増産の要求は他日を以て替へ難い、正に一刻千金といふか、物の上に附加される時間の價値の最も高いときであることを忘れてはならない。

我々は農業資材の現状に拘泥してゐるときではないと思ふ。米麥粟諸等主要食糧に於て戰爭勃發以來逆條件の擴大にもかゝらず反收を維持し或は増收さへしてゐる。このことは戦前の生産方式に拘はり、理窟を言つてゐる者には不可解な現實である。農業は建物の中に運び込まれ得る資材を對象とするものではない。現物として見ることに觸れることの出来ない物材も、やらねばならぬといふ決意に迎へられては貴重な財貨として姿を顯はすのである。

百尺竿頭に立つて一步を進め得るか否かは一に決意に係るものと思ふ。不足を擧げてゐては出来ぬ。物の充分ある筈のない、しかも力の限り物を造らねばならぬ現在を確認するならば、困難のドン底に衝き當つて始めて勇猛心の湧き上る如く、百尺竿頭にも大道が拓けよう。無いものを無いと究めたとき創造心は躍動するのである。

農業増産への挺身は國家への誠意に徹することである。例へば身を犠牲にしても大きく誠意を施したい。

〔中央農業會會長・貴族院議員〕

實業之日本 二月十五日號 目次 (昭和十九年)

決戦企業體制の躍進

營團と統制會の新方向……帆足計(四)

軍需會社をめぐる諸問題……杉山清(七)

大企業と中小企業……森喜一(一〇)

大東亞結合の根柢……宇野圓空(一四)

航空機増産の基礎條件……橋口義男(一四)

戰爭下の行動原理……藤山愛一郎(一三)

會談座 食糧増産と戰時生活

決戰食生活の設計……中澤辨治郎(元)

『決戰食糧』の確保……石坂城野武治弘(一八)

決戰食生活の設計……中澤辨治郎(元)

アメリカの軍需生産……大野信三(三)

交戰各國の都市疎開……(七)

共榮圈經濟建設だより……(三)

戰略と政略……丸山幹治(六)

大捷を決するもの……渡邊淺治郎(五)

〔時の人〕安藤利吉大將……伊藤金次郎(四)

萬葉集と軍歌……保田與重郎(四)

茶前茶後……奎城生(三)

交戰各國の女子動員……(三)

戰時増産と國民生活……石井良一(四)

決戰下の證券市場……奥村綱雄(五)

實業之日本

二月十五日

特 輯

決戦企業體制の躍進

帆足計・杉山清・森喜一

『決戦食糧』の確保

【座談會】

石坂弘 宮城孝治
吉植庄亮

子の實費 保險



歳9より歳0
付戻拂りは度年初
應低料保

組組互相

命生田代千

橋京京東 社本

投資信託

一口五百圓より(説明書進呈)

野村證券株式會社

大阪・市東區安土町二丁目
東京・都日本橋區江戶橋一丁目
名古屋・京都・神戸・岡山・廣島・高松・門司
福岡・金澤・新潟・静岡・札幌・京城・臺北

定評ある野村の

疲勞防止 回復止

除倦覺醒劑 ヒロポン錠

適一、過度の肉体及び精神活動時
應二、徹宵・夜間作業、その他
症三、睡氣除去を必要とする時
四、疲勞・宿醉・乗物酔
各種憂鬱症

包裝錠劑(錠中0.015含有)
30錠 50錠 100錠 500錠

大阪・市東區安土町二丁目
東京・都日本橋區江戶橋一丁目
名古屋・京都・神戸・岡山・廣島・高松・門司
福岡・金澤・新潟・静岡・札幌・京城・臺北

徽章バッヂ




(徽章の某送呈)

東京・神田・神保町二丁目
株式會社 内外徽章製作所
電話九段(33)0623・2534・2535番

株式投資

案内申込次第贈呈

中央証券株式會社

東京都京橋區京橋一ノ一

おちのち健康機器



疲れや病を防ぐ
保健の秘訣
みづおちのこわ張り
は萬病のもと
胃腸や動脈硬化が治る
女や子供老人晝夜間断で使用出来。
「説明書(圖解別)」一冊進呈
東京・都町四番町一丁目 林式健体會本部
店に有

發明特許

心配無用

斯して國策へ
各縣經濟部農會大好評

◎專賣特許 炭團煉炭
◎實用新案登録 炭團煉炭
報國の爲犠牲的に分權指導す(照會五錢切手封入の事)

長野縣下伊那郡伊賀良村
全國普及本部瑞穂會

征戰完遂に 通信機

佳友通信工業株式會社

(舊稱日本電氣株式會社)

東京・都芝區三田

虫下しに マクル錠

藥價 三〇錢
外二 七五錢
團體用

製造 大和産業株式會社

肺患 征服

獨自の化學力應用

肺病肋膜炎、肺カタル、肺門淋、肺腺炎など結核の諸病にはこれまで殆んど適藥なしといはれたのであるが、藥學の進歩は遂に化學力應用による療法を創見し、學界も認識を深めつつある。本部は結核治療に苦心研鑽の結果、創製の治癒劑を専門部門に完成せしめ、創製の治療道と相対つて多大の好成績をおさめてゐる。徒らな疑心を捨て、是非その眞價を確認せられ全快の光明を得られよう!!

大阪府阪急沿線
聖徳乃道相談部

農業増産への挺身

酒井 忠正

生産の在り方考へ方に種々區別せねばならないものがあることは當然である。例へば工業のやうに生産資材の限界が極めて判然としてゐるものと、農業のやうにそうでないものとの場合では此の點著しい區別があり、精神の持ち方といふ様なものゝ齎す効果の點でも随分異なるものがあるのである。

農業は土地と太陽と雨、この消費し盡せぬ資源を對象とする産業である。しかもわが國の農業は家族労働を經營の標準とするものであつて、一人の農民が經營者であり、各種の技術者であり労働者とならねばならないのであるから、個人の精神力如何の影響するところ極めて大きく、増産に對する覺悟が生産高に及ぼす關係は歴然たるものがあるのである。今日の増産の要求は他日を以て替へ難い、正に一刻千金といふか、物の上に附加される時間の價値の最も高いときであることを忘れてはならない。

我々は農業資材の現状に拘泥してゐるときではないと思ふ。米麥粟諸等主要食糧に於て戰爭勃發以來逆條件の擴大にもかゝらず反收を維持し或は増收さへしてゐる。このことは戦前の生産方式に拘はり、理窟を言つてゐる者には不可解な現實である。農業は建物の中に運び込まれ得る資材を對象とするものではない。現物として見ること觸れることの出来ない物材も、やらねばならぬといふ決意に迎へられては貴重な財貨として姿を顯はすのである。

百尺竿頭に立つて一步を進め得るか否かは一に決意に係るものと思ふ。不足を擧げてゐては出来ない。物の充分ある筈のない、しかも力の限り物を造らねばならぬ現在を確認するならば、困難のドン底に衝き當つて始めて勇猛心の湧き上る如く、百尺竿頭にも大道が拓けよう。無いものを無いと究めたとき創造心は躍動するのである。

農業増産への挺身は國家への誠意に徹することである。例へば身を磨り減らしても大きく誠意を凝したい。

〔中央農業會會長・貴族院議員〕

實業之日本 二月十五日號 目次 (昭和十九年)

〔卷頭言〕 農業増産への挺身……………酒井 忠正……………(一)

決戦企業體制の躍進……………帆 足 計……………(四)

營團と統制會の新方向……………杉 山 清……………(七)

軍需會社をめぐる諸問題……………森 喜 一……………(一〇)

大企業と中小企業……………宇 野 圓 空……………(一四)

大東亞結合の根柢……………橋 口 義 男……………(一八)

航空機増産の基礎條件……………藤 山 愛 一郎……………(二二)

戦争下の行動原理……………宮 坂 弘……………(二六)

食糧増産と戦時生活……………水 野 孝 治……………(二八)

座談會 『決戦食糧』の確保……………吉 植 庄 亮……………(三八)

決戦食生活の設計……………中 澤 辨 治 郎……………(元)

アメリカの軍需生産……………大 野 信 三……………(三)

交戦各國の都市疎開……………共 榮 團 經 濟 建 設 だ より……………(七)

共榮團經濟建設だより……………丸 山 幹 治……………(一三)

戦略と政略……………渡 邊 幾 治 郎……………(一七)

大捷を決するもの……………伊 藤 金 次 郎……………(二一)

〔時の人〕安藤利吉大將……………保 田 興 重 郎……………(二五)

萬葉集と軍歌……………戰 時 小 識……………(二九)

茶前茶後……………壺 城 生……………(三三)

交戦各國の女子動員……………戰 語 豆 辭 典……………(三七)

戦時増産と國民生活……………實 業 川 柳……………(四一)

増産新風土記……………石 井 良 一……………(四五)

決戦下の證券市場……………奥 村 綱 雄……………(五〇)

決戦企業 体制の躍進

営團と統制會の新方向

帆 足 計

(一) 自由主義經濟下の 國家規制

企業の國家性といふことは、自由主義經濟下においても、必ずしも輕視せられてゐたわけではなかつた。これを歴史的事實に徴しても

業知のやうに、企業形態の個人組織から會社組織への轉化自體が、歐洲においては、はゆる「産業騎士道」、我國においては「士魂商才」といつたやうな、つよい責任感と信用の上にたつ高度の倫理觀によつて推進されたものであつた。その意味において、近代會社組織による産業の飛躍的發展は、いはゆる個人商店的な素町人根性よりもさらに高い文化性、政治性並に倫理性によつて培はれたものであるといふことができる。

かくて會社組織が發展し、企業の社會的、公共的役割が大きくなるにつれて、そこに之を規制する

する商法なるものが成立する。さらに瓦斯事業であるとか、交通、運輸、電力といったやうな特に公共的色彩のつよい事業に對しては、それ／＼別個に單行の事業法が制定されるに至る。

さらにまた、企業活動に對する國家的規制は、單に個々の企業經營の領域に止らず、企業の共同的活動形態であるところの各種の組合、その他の企業聯合體に對してもまた要請せられる。ことに組合、又はカルテル等が急速に生長し、單に當該産業の健全なる發展を維持防衛するといふにとどまらず、やゝもすれば、その大きな勢力を利用して、不當なる獨占利潤を獲得せんとする弊が、いたるところにみられるに至るや、各國ともあるひはアンチ・トラスト法、あるひはカルテル取締法を制定し、之を規制する必要に迫られた。わが國においても、昭和六年制定さ

れた重要産業統制法並に同改正法は、やはり、カルテル及びトラストの活動に對し、國家的見地から規制を加へたものである。

(二) 國家性強化の根柢

自由經濟から統制經濟へと轉移し、さらにそれが二段と高度の戰時計畫經濟に轉換してくると、上述の企業の國家性並に經濟團體（企業聯合）の國家的性格といふことは、ますます／＼つよく要請される。自覺されねばならなくなつてくる。その所以は如何。

それは、第一には、戰時計畫經濟下にあつては、舊來の自由經濟時代におけると異なつて、國民經濟の全活動は、端的に國家目的に向つて、計畫的かつ意識的に運営されねばならぬことに基く。自由經濟下においては、各企業は、それ／＼自分のことだけを考へてをれば、みえざる法則によつて、結

局全體の調和が達せられると考へられたのであつた。しかし現在では、個々の企業は、國家の計畫經濟の一環としての職務を、意識的に自覺して、運営されねばならぬ段階に立ち至つたのである。資材も、勞務も、技術も、總てかゝる國家計畫の要請にしたがつて、組織的に動員されるのである。

第二に、企業の國家的性格の明確化を迫るものに、勞務動員の問題がある。現在すでに、企業における勞務者は、恣に職場を移動することを禁ぜられてゐるのみならず、また數十、數百萬の國民は、父祖傳來の職業を離れ、あるひは轉業者として、あるひは、應徵士として、またあるひは動勞報國隊挺身隊の一員として、國をあげて航空工廠たらんとする國家の要請に應召しつゝある。かく考へると、企業の營利的性格がこゝに再檢討され、その國家的義務が前

面に押しだされてくることは當然である。いまや一塊の石炭も、一滴の石油も、一キロの電力も、一人の勞務者も、企業の營利的目的に奉仕するものではなく、軍需生産といふ國家の要請に應召するものである。

これに照應して利潤の問題も一かつてのやうに、企業の目的ではなく、企業能率計算の補助的パロメーターであり、生産増強の資金的側面を代表するものとして取扱はれねばならない。このやうな企業新體制への動向を代表するものに經理統制令があり、各種營團法があり、軍需會社法の制定がある。同時にまた經濟團體（企業聯合）の新體制をもつとも端的に象徵するものに即ち統制會がある。

(三) 營團の公共性と 能率性の問題

企業の國家的性格を、法制的に明確にしたものとして、もつとも注目するべきものは、さきに制定された會社經理統制令である。即ち、その第二條には次のやうに規定されてゐる。

「會社ハ、國家目的達成ノ爲メ國民經濟ニ課セラレタル責任ヲ分担ス

ルコトヲ以テ經營ノ本義トシ、其ノ經理ニ關シ左ノ各號ニ掲グル事項ノ遵守ヲ旨トスベシ

一、資金ハ之ヲ最モ有益ニ活用シ苟モ人的及物的資源ノ濫費ニ陥ルガ如キコトハ嚴ニ之ヲ避ケルコト。

二、經費ノ支出及資産ノ償却ヲ適正ナラシムルコト。

三、役員、社員其ノ他從業者ノ給與及其ノ支給方法ヲ適正ナラシムルコト。

四、利益ノ分配ヲ適正ナラシメ自己資金ノ蓄積ニ努ムルコト。

この新しい企業理念への動向が特殊的な企業形態として體現せられてゐるものに、即ち各種營團並に金庫があり、同一の精神は先般制定された統制會社令にも色濃く織込まれ、さらに今次實施をみるとしつゝある軍需會社法は、かゝる新體制企業理念の軍需生産企業への適用であると解することができ。

企業新體制の骨子は所謂『經營と所有との分離』といふやうな粗笨な表現よりも、むしろ企業をもつて、資本・經營・技術・勞務の有機的一體として結合した人的結合體と考へ、全體としてその國家

的性格 明確にするといふことにある。

營團といふ企業形態が、かゝる企業新體制の理念からみて、一つの象徴的な存在であることは否定できない。特に營團が今後一般企業形態に及ぼす示唆と影響とは歴史的なものとさへあるといふことができる。したがつて、今後における營團の運営に對しては大きな期待がかけられる。しかしながらこのことは、營團形態が現状のままで完璧なものであると考へるとか、または營團形態が、現在のやうな配給業乃至金融業、又は戰時特殊施設の域から出て、生産工業にそのまま適用されると考へるとかいふことは別であつて、これらの點についてはわれ／＼は、そこに幾多檢討の余地があることを看取する。

まづ第一には、營團形態が、その弱點たる從來の國策會社的性格をどの程度に眞剣に檢討し、脱皮してゐるかといふことである。いふ迄もなく、企業新體制の眼目をなすものは、企業の國家的性格の問題である。しかし乍ら、企業が眞に國家的であるためには、同時に、現實問題として、その運営

の能率性といふことが檢討されねばならない。そしてこの能率といふ問題は、同時に人と運用の問題にかゝつて居り、それはすべて魅力ある人間活動の原動力をなす『創意と責任』といふものと不可分の關係にある。就中、責任といふことは、單なる經濟倫理ではなく、企業經營に對する實際上の責任、即ち企業の能率的な生産活動によつてこれを維持擴張し、その生産力をもつて軍需物資を賄ひ、その資力をもつて國家財政を負擔するところの、自主的な、建設的な、積極的な態度を意味するのである。

かく考へると企業經營の本義は國家目的に即應し、最大の生産能率をあげると共に、その運営を、他の援助に依存せず、あくまで自主的な責任企業計算の上に立つて行ふといふことにある。勿論、國策のためとあれば損をしても生産をせよといふことも、戰時下經濟人の、倫理的な心構へを示すものとしては大切なことであるが、一の繼續的な經濟政策としては、おのづから全然別個の問題となる。探索ヲ無視して經營を繼續し、生産ヲ擴充することが不可能なこと

はいふまでもない。それ故にこそ、國家の繼續的な政策としては生産能率をあげ、原價を切り下げそしてあくまでも經營は自己の計算と責任においてやりとげてゆくといふ激しい氣魄とつよい責任を持たせることが肝要なのである。

同時に、國家としては、このために、適正な價格政策を實施し、企業經營者が左顧右眄することなく生産増強の職分に邁進し得るがごとき環境と條件とを整備することがもつとも大切である。企業經營において、換算を輕んじ、損失を生じたならば、國家の助成金等に依つてカバーして貰へばすむといふやうな安易な考へ方を――

特殊の戰時施設の部面に於てはとにかく――一般的なものにするとはいふことは、吾人の斷じて採らざるところである。

營團經濟の一つの特色が、もし國家資金の參與と、國家助成金の支援に依る經營採算の營利觀念からの解放といふ點にあるとするならば、その限りにおいては、前述のやうな理由に依つて、之を一一般化することは不可能である。それは當然國家の必要とする特殊施設に限らるべきである。もつとも上

述のことは營團經濟の一面にすぎない。同時に前にも述べたやうに企業新體制の狙ひは、企業の國家性と相並んでその能率性にも置かれてゐるといふことを忘れてはならない。

かく考へると、狹義における營團經濟の主たる對象乃至領域は、やはり、能率性よりも公共性の方により重點をおかねばならぬところの配給部面又は金融部面の一部その他國定の緊急必要とする特殊施設の範圍に、おのづから限定さるべきと考へる。

同時に、營團經營の今後の問題としては、營團の内包する最大の弱點ともいふべき能率性の問題について、鋭い檢討を、その機構並に運営に對して加へることが要望される。例へば營團首腦部の創意と責任の尊重について、又それと官廳との關係について、理事の權限、任期等について、職員の給與制度、償還必罰について、等々營團の運営全般に亘つて鋭い檢討を要すべき點が多々あると信ずる。

（四）營團の理念と企業の在り方
上述のやうに、嚴密な意味にお

ける、營團經營の形態が、特殊領域に限定さるべきであるといふことは、必ずしも營團企業形態の内包する理念そのものが限定さるべきものである、といふことを意味するものではない。營團企業形態の内包する種々なる要素は、明らかに新しい企業形態の進路について、深い示唆を與へるものである。廣義における營團經濟理念は、今後生産企業をも含めて、企業新體制の中に、強く浸透さるべきものであると信ずる。

最初に述べたやうに、かつてわが國において、株式會社組織による企業形態が、合本組織の名のもとに、舊來の狭き個人企業の舊殼から脱皮したときに、その推進力となつたものは、責任を尊び、信用を重んじ恥を知ることの『士魂商才』といふ武士道的理念であつた。いま、自由經濟への歴史的轉換に際しこのやうな歴史をふりかへると、新時代に應ずべき『公益優先』下の企業形態に對して、營團理念が大きな示唆を與へるものであるといふことは否定できない。しかしながら前にも述べたやうに、このやうに、このやうな企業新體制の理念が、生産工業に適用

用されるためには、能率といふことが更に附加へられて考慮されねばならぬのである。

生産といふ場面は、自然と人間の假借なき闘争の場面である。

それは技術及び能率の最も重んぜられる場面である。この生産の場面は、官僚主義、形式主義、または無責任と絕對に兩立せざる領域である。いふまでもなく、生産企業において最も必要なことは、企業責任者の一貫的指導、強力なる責任感、奔放なる創意である。この點に對し、國策會社の一變形たる性格を有する營團が、そのまゝの形において、生産企業に適應しかねるゆえんが存する。

同時にわが國の企業經營において、最も遅れてゐると考へられるものゝ一つは、生産技術並に勞務管理の問題である。技術及び勞務能率の向上は、人間性の本質とその内在的能力に對する深い理解と認識の上にたつてのみ可能である。言葉を換へていふならば、企業經營者がその管理する、技術及勞務の本質を正しく理解し、その創意をあますところなく汲みつくすことの能力の廣さど深さとに比例するのである。そしてこのやう

なすぐれた生産技術と、勞務管理とは、企業の正しい在り方の上にのみ可能であることを考へる時、この面からもまた、企業の新體制の重要性が痛感されるのである。

（我國の生産能率が歐米の十分の一乃至六分の一といふやうな低能率にあるといふことは、何といつてもわが經營の在り方に、商業本位、利潤本位の悪弊が集積つてゐたことを如實に物語るものである。）

かく考へると、主として國家の戰時特殊施設の領域に、營團が設定せられ、配給部面に統制會社令が施行されんとしてゐるのに對して、生産企業の新體制の方向としては、軍需會社法を中心としての進展を看取することが出来る。

即ち、軍需會社法の狙ひは、一方において、企業の國家性を明確にすると共に、他方において企業指導者の責任と創意とを尊重し、國家はこれに對してあらゆる援助

性、並に企業經營の自主性を尊重し、輕視はしないが、なほ且つ株主總會等に依る企業經營への制約を或る程度緩和し、經營責任者の創意と責任とを強化するの方針をとる。企業責任者をして一層増進に邁進せしむるがごとき環境の設定に意をもちひてゐるのである。

（五）統制會の新しい展望

企業の新體制と相並んで、經濟團體の新體制の代表的なものは、いふまでもなく統制會の組織である。しかしながら從來統制會の機能と化したところは、第一に統制會に課せられた業界の綜合的統制運營の前提條件たる、行政の一元化及發註の一元的調整といふことが極めて困難な條件におかれたといふことである。即ち、從來は軍需生産に關する限り、生産統制は陸海官民に分立し統一した責任綜合行政は存在せず、之が協力機關たる統制會も全く牛身不隨の状況におかれてゐる。

しかしながら、いまや軍需省が設立せられ、發註調整の問題が解決の緒につきつゝある現在、統制會にはこゝに新しい展望がひらけつゝある。軍需省が、眞に綜合的行政力、擔つてくるにつれ、統制會は當然これが協力機關としてその機能の強化されてくることは必然である。尤も軍需省への生産行政の一元化及發註の集中といふことはすべて今後の困難な課題である。しかしながら、少くとも軍需省が強化されてゆく程度に應じて統制會も當然強化され、同時に從來陸海軍に直屬してゐた發註並に管理工場が軍需省に移管されてくるに従つて、陸海軍工業會は漸次統制會に接近融合してゆくことが豫想される。かくて統制會は、資材配給等の經濟行爲の許可、地方支部強化による會員企業現場把握の強化等と相まつて、初めて正常なる活動を開始し得るのである。

さらにまた統制會の運營にとつて一つの障礙は、統制會の持つてゐる國家的性格と、會員企業の持つてゐる營利的性格との矛盾であつたが、この點もいまや軍需會社法の施行に伴つて漸次解消せんとしつゝある。かくて、從來やゝもすれば業界と統制會とが、二律背反的關係にあつたといふやうな事情も解消してゆき、會員企業と統制會との一體的關係の確立がこの面からも豫想されるのである。

業新體制の理念が、生産工業に適用

は、企業經營に對する資本の重要

おもふに現下決戦經濟の要請は一方においては、行政の一元化、發註の調整、企業の整備、生産分野の調定、規格の統一等、綜合的統制の強化によつて生産能率の昂揚を圖るにあると共に、他方にお

決戦企業 体制の躍進

劃期的な軍需會社

運營の意義

軍需會社が何故に生れ出でざるを得なかつたかの現實の要請について、そしてまた此の會社が國家性と營利性とを同時に持たねばならぬことについても、今日己に或ひは政府筋の人により、或は諸學者、諸實業家に、更に今期議會においても論じ盡されてゐる。そしてまた三菱重工以下百五十社の第一回軍需會社指定も一月十七日に行はれ、その生産責任者も着々決定發表されてゐる。

已に誕生して、その活動に最大の期待のかけられてゐる軍需會社

いては、直通的、機動的措置を敢行することによつて、戦局の要請に迅速、的確に對處すべきことにある。これは決戦經濟下の二大要請であつて、軍需省の設立、統制會の整備活用等は、前者の要請に

應へるものであり、軍需會社法の施行、軍需監理部の新設等は、後者の要請に應へるものといふことができる。この二つの國家要請は外見上互に矛盾するやうにみえるが、何れも肝要不可欠の要件であ

つて、統制運營の衝にあたる者は、この兩者を巧みに結合し、調整してゆかなければならない。吾人は、かゝる意味において、軍需省が、右手に統制會を握り左手に軍需會社法を活用し、軍需

省、統制會、軍需會社の三者が三位一體となつて、戦時決戦經濟統制の綜合的並に機動的運營の完璧を期せられんことを切に期待するものである。
(筆者は重要産業協議會事務局長)

軍需會社をめぐる諸問題

杉 山 清

に關しては、その健康な發展をこそ庶幾すれ、既に言ふべき何物もないやうに思はれる。併しそれで

てゐる。

所謂高度の綜合生産を實現する

ゐた。今や軍需會社の實施によつて、國家は軍需會社の從來營んで

利でもある。

まことに、氏の言はれる通り、

は編輯にならぬらしい。編輯氏の強制におされて、私は、極く簡単に、軍需會社の劃期的な意義と、したがつて生ずる新たな諸問題とについて、卑見をも語つてみようと思ふ。

對象としてゐる點に、從來の行政機構と異なるのである。從來、國家の行政は、物の生産を直接の對象としてゐたものは、極めて小範圍に限定されてゐた。多くは、生産に對しては間接的な關係にあつた。物を生産する組織の外部的行為を統制または管理するに止つて

ゐた。今や軍需會社の實施によつて、國家は軍需會社の從來營んでゐた外部的行為、ことに資材の調達や勞務の供給に對しては、勿論のこと、生産目的そのものを直接管理することとなつた。軍需省の任務の大半は、この直接生産を確保するにある。他方、軍需會社は、この任務を専ら生産經營に集中し

て、國家は軍需會社の從來營んでゐた外部的行為、ことに資材の調達や勞務の供給に對しては、勿論のこと、生産目的そのものを直接管理することとなつた。軍需省の任務の大半は、この直接生産を確保するにある。他方、軍需會社は、この任務を専ら生産經營に集中し

新聞紙上において、軍需會社の劃期的な意義について、實にいふことを言つてゐられる。

『軍需省航空兵器總局の機構をその一例としてみるに、五局二十一課の陣容の如きは、我が行政機構史上、毫に劃期的な内容を示し

てゐる。今や軍需會社の實施によつて、國家は軍需會社の從來營んでゐた外部的行為、ことに資材の調達や勞務の供給に對しては、勿論のこと、生産目的そのものを直接管理することとなつた。軍需省の任務の大半は、この直接生産を確保するにある。他方、軍需會社は、この任務を専ら生産經營に集中し

て、國家は軍需會社の從來營んでゐた外部的行為、ことに資材の調達や勞務の供給に對しては、勿論のこと、生産目的そのものを直接管理することとなつた。軍需省の任務の大半は、この直接生産を確保するにある。他方、軍需會社は、この任務を専ら生産經營に集中し

の期待のかけられてゐる軍需會社

の期待のかけられてゐる軍需會社

の期待のかけられてゐる軍需會社

の期待のかけられてゐる軍需會社

法の運営と軍需管

理官

先づ運営の至妙について軍需管理官に要望しておこう。自由経済の時代には、政府は、経済のことは一切民間任せにしておいたのである。傍で監督はしてゐても、干渉はしなかつたのである。間違ひのあつた時にだけ摘發したのである。統制経済の時代になつて、要求や干渉が激しくなつても、やはり、從來の行き方を捨て切れずにゐた。

これを競馬にたとへれば、統制経済になつても、騎手は依然として從來の騎手であり、馬券の制度もそのままであつた。ただ時局の要求し政府の好むやうに、競馬の規則を改正し、馬券の制度に手心を加へてゐただけである。

然るに、軍需會社法の制定を契機として、政府が騎手にならうといふのである。馬券の制度も廢止して、而かも、從來の競馬以上の効果をあげやうといふのである。鞍手、騎手の意に満つものに取り替へられる。駿馬は駿馬だけにはやゝ立つてもゐる。ここで鞍上人なく鞍下馬なしの絶妙が期待されな

かつたら、人々の絶望は、蓋し救ひ難きものに至るであらう。鞍上人なく鞍下馬なしの人馬一體の境地の出現には、馬は馬としての人の働きが乗り移り、人は人としての馬の働きがわが物になることが必要である。

乗馬といふ技術の至れる境は、前述のやうに、人馬一體の境地であるが、それには、人としての限定と馬としての限定とを承認しつつ、而かも、この限定の條件を克服することが必要である。四本足は馬のものであつて自分のものではないが、この自分のものではない四本足を自分のもののやうに動かすところに、馬術の絶妙があるのである。この場合には、四本足を自分のもののやうにしうなどといふゴチナイ意志が働くやうでは駄目である。限定條件の克服などといふ考へがある限り、限定感

は決して除却せられぬのである。條件は克服せらるべきではなくて、條件そのものになるとき、條件の束縛から脱却する。即ち、自由になるのである。馬を使ふといふ技術は、その跡を亡くして、人は人でなく、馬は馬でなく、人馬、または馬一人と、人と馬との間に連字を入れた一つの意志のみが働くといふことになつて、至妙の境に至るのである。

技術の妙は、それ故に、無技術のときに最もよく現はれるのである。兵法が人倫に發するやうに、技術は誠であるのである。軍需會社といふ駿馬中の駿馬を如何に走らすかは、一々かかつて、軍需管理官の技術、否、誠に存するのである。死馬の骨をすら五百金を以て購つた古訓がある。政府の意志を會社に乗り移らせるものこそ軍需管理官であり、企業に國家性を賦與し、生産力に國家的自覺を齎らすのも、一にかかつて、上から下までの軍需管理官の行動に存する。

三略は教へて言ふ「軍國の要は衆心を察して百務を施すに在り、よく微を守らば乃ち其の生を保全ん」と。經濟學的に言へば、軍需管理官に、眞の意味における企業家職能が要望せられるのである。或る學者は、眞の意味の企業家職能を、創意と革新(Initiative and Innovation)と要約してゐるが、今日の言葉でいへば、創意と工夫である。軍需管理官の創意と工夫を通して、官民一如の企業體

制が世界史的に新しく確立されて行くのである。軍需管理官の澄み切つた忠誠心と粉骨の努力に期待されるもの極めて大である。

企業家と經理觀の

變革

民間企業家に頭の切り替へを要求せられること已に久しい。企業家は異口同音に言ふ「我々は儲けようなんて氣持で商賣はしてゐませんよ」と。さうでもあらう。併し、さういふ言葉で前以て防禦の楯を作つてゐることもある。「商賣人が儲かりませんなあ」と口癖のやうに言ふときには、相當以上に儲かつてゐる時ですよ。本當に儲からなくなつて駄目と決つたら、商人は黙つて物を言ひませんよ。」と世間知らずの私を戒めてくれた人がある。さういふことも確かだ

なと、爾來、私は、人の話に、肩唾で耳をかたむけるやうにもなつてゐる。

ここには其の問題には一切觸れない。ただ一言、日本興業銀行調査部刊の「昭和十八年上期本邦主要銀行會社業績調査」をみると、右のやうな考へ方を確證するやうな數字の出でゐることだけを語つておく。儲からんといふもの地、制や干渉なしに放任してくれておいたら、もつとうんと儲かるであらうに、頼んだな」といふ意味も含まれてゐやうと解釋してゐる。私が、ここで、企業家に望みたいのは、經理觀の轉換である。會社經理統制令が從來の經理觀の變革に非常な貢獻をいたしてゐることは言ふまでもなく、更に、これが改正も政府において企てられてゐるといふ。私は、同令第二條に謂ふやうな問題を、改めてここに問題にしうといふのは決してない。私が言ひたいのは、複式簿記的會計方法に囚はれることなけりといふことである。複式簿記的會計方法が如何なる環境のうちに成育されたかを反省してみることが必要である。從來の企業は、内部的には、計算可能な資本を以つて、外部的には矢張り計算可能な市場に於いて、一つにまとまつてゐたから、貨幣計算が可能であつたのである。その貨幣計算を形式的に精密嚴格に行ふ技術が複式簿記的操作であるのである。從來の會計方法が從來の企業を測り得たのは、幸ひにして、從來の企業が内外とも資本といふ計算可能なも

のによつて統一されてゐたからである。然し、今日の諸企業、特に軍需會社には、從來の方法では計算不可能な國家目的あるひは政治が加はつてゐる。否、それによつて一つにまとまつてゐる。そして市場に代つて、別個の計算制度が、企業および國民經濟の組織機能を実現してゐることは、目を蔽ひ得ない現實である。然りとすれば、從來の會計方法に囚はれることの如何に誤りであるかは多言を要しない。

現に滿鐵の經理の變遷をみよ。國家目的を明瞭にすると共に、勘定科目に責任制が生じたといふ。企業を一の單位として全體として儲けが幾らといふときには、勘定科目は資本の流動一過程であつて、何ら獨立の意味を持ち得なかつたものである。然るに、勘定科目に責任が生じたといふのは、各勘定科目が獨立になつて、それが、全體の生命になるからである。この意味を通して全體の生命を幾らかでも正確につかまうといふのが、勘定科目に責任制が設けられた所以である。今日の原單位切下の問題と合はざる考へて誠に興味深い已にかういふ事實もある。

創意と工夫を以て日本經濟を今日の隆盛にまで甯らした實業人である。新しい方法を直ちに構想出来ないまでも舊來に戀々としてゐる理由はない。

更らに思へば、複式記入といふ技術も絕對ではあり得ないであらう。會計を把かむ方法があれだけといふことになれば、現實はそれつまりといふことになつてしまふのである。昨日までのものが全部で最善である證據は何處にもないし、また、現實の現實たる所以は、その無限定性に存するからである。人つたものを左につけて、出たものを右につけるといふのも考へてみれば、非常な名案のやうにもあるが、またたわいもない考案ではないか。そして左右のバランスをとるために、赤字で書いた黒字で書いたりするもの、子供らしいと言へないこともなからう。皮肉は別として、とにかく、左右のバランスに囚はれて了ふことだけは問題である。資本金は負債で、建物およびストックは資産だといふのも、考へてみればおかしなものである。一體、眞の財産といふやうなものは、プラス・マイナスを超えた絶対値みたいなものではないか。深刻な國防經濟の眞只中であつて、リストのいふ精神的資本までが、問題になる今日においては、左右のバランスや赤字や黒字で經濟力や企業力の判定がつかないことは當然であらう。戦費の生産性や公債の投資性などは、到底、右のやうな考へ方では考へられるものではない。右のやうな方法でたとひ考へられなかつても、さう考へざるを得ないのが現實であるとすれば、我々は、素直に、現實に従はなければならぬのである。公債は投資なりと考へることに躊躇するとしても、保險會社における會計が、創業の數年あるひは十數年は常に赤字になつてゐるといふこと、新規加入がみんな負債の側に記入せられてゐるといふこと、保險會社が眞に儲つてゐるかあるまいかは、閉業のとき以外には分るまいといふことなどを考へることに躊躇することは出来ないであらう。

ひとり保險會社のみでなく、凡ゆる事業にさういふことのみられることを考へるならば、徒らに半期ごと一年ごとの會計年度に囚はれたり、左右のバランスにのみ氣をやむことは、最も慎まなければならぬことであらう。私は、企業家の頭の切り替へといはれるものの一つとして、經理觀の變革を、ここに要請しておきたいのである。

價格の引上と頭の切替

紙數の都合で、最後に軍需會社法が、航空機生産の隘路となつてゐた貨銀、價格、利潤等に關する諸統制令を取り除いたことについて一言しておかう。日本産業經濟紙上の座談會において、軍需省總動員局監理課長平井豐一氏は、「私共が最終目標と思つてゐる法規は外す積りで、まだ三分の一もやつてをりません」と語つてゐるやうに、勝つためには、生産増強のためには、從來の諸統制令が相當大幅に取り外される可能性がある。これについての私の解釋を語りたいのが、ここでの目的である。實業人の多くは、經濟あるひは價格について、自分達の考へる通りなつて來ると、獨りホソエム向きもあるときく。公定價格は價格の本質に反するもの、配給は經濟の在り方に對する誤れるものといふ從來型の考へ方に囚はれてゐる人々

からすれば、さういふ獨りよばりの解釋も成りたう。併し、資材についても勞務についても已に市場の存在しなくなつた今日である。價格や貨銀は、どんなに引き上げられやうと、それは市場において成立する需要供給價格とは、全くその本質を異にしてゐるのである。實業人は、とかく、價格は引き上げられさへすれば正しいものに近づくかのやうに、今日錯覺に陥つてゐる。軍需會社法による統制令の取り外しもつて、自己の經濟觀の勝利の如くに考へて、これを以て自己の營利欲を合理化せんとするならば、非常な誤りである。政府が政策をのみ強行して、その經濟學的理論づけを兎角行はないために、各人各様に、我田引水を行つてゐる。私は、政府の價格概念は、從來の均衡連續のものから不連續のものに移つてゐるやうに思はれる。今日は、量子力學といふ最新の物理學においても、不連續の理論が決定的であるといふ。カントの哲學書をよむ人が、彼の自然科學の理論に驚嘆するやうに、世界觀といふものは、徒らに、文化の面と自然の面とに峻別されてゐるものではない。私は物

此方試以、需要完整PDF請访问：www.ertongbook.com

理學の不連續性を經濟學に適用せよといふのではない。新しい價格理論を裏付けすべき哲學は、あるやうに思はれる。ここには其れを未だない實業人の利潤欲合理化に利用せられないやうにしなければ

決戦企業 体制の躍進

中小企業の優性の

活用

戦力増強、しかも刻々その苛烈度を激化し來つて今やその勝敗の決が本土防衛第一線の消長に關すると傳へらるゝ南太平洋航空戦の戦報が日夜國民の決意をより強化しつゝある現段階に於ける戦力増強は、その含む意義に於てまことに重大なものゝあるを感ぜざるを得ない。

皇國の興廢、東亞の存亡、正にこの決戦に勝を制するか否かに繫つてゐることに想ひを至すならば、この「戦力増強」といふ四つ

ならないことはいふまでもない。下手をすれば、闇の臨時特例化をもたらし危険がある。首相の衆議院本會議の演説に、「勝敗は紙一重だ」とあるやうに、價格の問題も、別言すればインフレ問題も紙

大企業と中小企業

—— 中小企業再認識のために ——

森

喜

一

の文字の作り出す意義は極めて嚴肅且つ固くからざる力を以つてわれ／＼に迫つて來りつゝあるのを知る。

皇國全員を擧げて戦闘配置に就く此時、生産部署に於ける關鍵産業が最も強力なる戦闘配置行動を要請するゝのは當然であり、その戦闘配置とは産業生産力の總力的結集であり、當該生産過程の全能力的運動であり、生産要素の残すところなき活用化である。

所謂企業整備の過程もこの意味に於て、最も強力且つ大なる工業戦闘配置の過程であり、従つてそれはあくまでも戦時工業生産力の

一頁の微妙にある。他の諸政と相俟つてここでインフレを説述する餘裕もなし、またこれは私の任でもないやうである。併し價格を不連續とみよとするのが、新しい價格観であり、そしてまた政府

の考へ方でもあるやうに思はれる。然りとすれば、軍需會社の購入價格は、さらに新しい價格観のもとづくものと考へねばならず、先きもふれたやうに、價格引上を以つて、頭の切り替への問題の解

決にも國民一體の努力が必用である。時間と紙数の都合で、盡りた。他の問題は一切割愛しておく。尚ほ引用註記も紙數編輯の都合で割愛させて頂く。
(筆者は早大助教授)

總力的結集を核心とする性格を帯ぶるものである。それ故に企業整備の主方向が高度生産性を有する大企業を中心により、劣る生産の中小企業をそれに整備配置することに指向されたのは當然である。

併し、當然であるといふことはそれが總てに於て合理的であるとは、され得ないことは云ふまでもない。

大企業がその優れた技術、生産設備、有利な生産管理によつて、劣つた技術と生産設備、統制なき生産管理者の支配する中小企業よりもその生産力乃至生産性に於て優れてゐることは常識であつた。

だがそれは經濟的な一般常識であると共に、一般性の中に特殊なるものを埋没して了ふ恐れのある事も確かであり、この點、企業整備の主方向の推進に若干の摩擦の起つたことも此むを得ざる事柄であつた。

そしてこの點についての反省が、機械工業に於ける規模別經營にみた生産性の二結果に基づいて、一部に行はれてゐることは確かに正しいものである。

例へば精密機械統制會調查による工作機械生産の効率(工員一人當り年産額)に就て觀たものゝは單機械企業では大企業八二、中企業

七八、小企業一一九、單機械、多機種を合せ生産重量で觀た場合は大企業指數七六、中企業七七、小企業一〇六となつて小企業が最高効率を示し、大及び中規模はそれより著るしく低いことを示し、電氣機械統制會調查の勞務者一人當り生産高、工作機械一臺當り生産高及び資本金一萬圓當り生産高に就て觀ると資本金二三百萬圓の中經營が最高効率をなし、次は二三十萬圓の小經營、その中間の五六十萬圓程度、二千萬圓以上の大經營は最低をなしてゐる。

併しこのことは整備による企業系列配置の過程に現はれた一現象であり、それが從來の如き雖然たる大企業對中小企業關係から生じたものでなく、所謂協力工業體制確立による中小企業に内在した諸缺陷を政策の遂行によつて是正した結果であると考へ得るが、従つてかゝる適當なる政策措置は中小

とする時は

工業の有する力を確實に發揮せしめ得ることを示唆するものであり、政策の勝利を語る一端でもあらう。と同時にこのことは中小企業一般性に含まれて来たその優性の存在を語ると共に、整備政策の主方向はこの優性を活用し、工業生産力の重點的結集へ鋭く指向することによつて、時宜に適へるものたり得るのであることを示してゐる。

この生産性（一職工當り生産高を以つて一應の指標とする）を大企業對中小企業の比較に於て從來の統計によつて今少し検討する必要があるが、それは結局——今迄に發表を許された統計の限りでは——中小企業の低生産性を示す以外には出ないのである。

大企業と中小企業
の生産性

今、昭和十三年度工場統計表に依り職工一人當り生産額をみると機械器具工業では

職工	一〇一	一五〇	二〇〇	二五〇	三〇〇	三六〇	四〇〇	四六〇	五〇〇	以上
未滿	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人
滿	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人

といふ状態で職工一千人以上の巨大工場の一人當り生産額を一〇〇

平均	一〇一	一五〇	二〇〇	二五〇	三〇〇	三六〇	四〇〇	四六〇	五〇〇	以上
未滿	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人
滿	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人

使用職工五人以上四十九人以下の小工場は順次生産性が向上し、一九九人以下といふ典型的な中工場、及び五〇人以上九九人以下といふ小工場中の大なものでは明らかに一千人以上の巨大工場よりも良効率をなしてゐる。そして大工場はいづれも一千人以上の巨大工場よりも高いことを明かにし、結局、本部門に於ける生産性はその規模の大なるに従ひ向上し巨大工場に至つてそれが低下することを語つてゐる。これを小・中・大の三つの規模に大きく分けてみると

平均	小工(一〇〇)	中工(二〇〇)	大工(三〇〇)
大工場平均を	三六〇圓	四八〇圓	五二六圓
一〇〇として	一〇〇	一〇〇	一〇〇

の如く大工場は斷然優位を示すのである。すなはち、この結果は從來の中

此處に疑問とすべきは生産性なる

平均	一〇一	一五〇	二〇〇	二五〇	三〇〇	三六〇	四〇〇	四六〇	五〇〇	以上
未滿	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人
滿	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人

ものは斯かる名目價格によつて果して示され得るかどうかといふ點である。生産性といふときには、そこに生産の質の問題が這入り込まねばならないと考へる自分はこれ丈では生産性を云ふる條件に缺くるものであると言はざるを得ない。勿論、私企業の採算面からのみ生産性を考へるのならば或ひはそれで事足りるかも知れないが、國家生産力結集といふ視角に立つてこれを視る時にはそれでは決して満足され得ないのである。生産性の質的な考慮を行ふべき資料を残念乍ら持たないのでその點を

且つ工場統計表には表された數

平均	一〇一	一五〇	二〇〇	二五〇	三〇〇	三六〇	四〇〇	四六〇	五〇〇	以上
未滿	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人
滿	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人	〇人

字は、玉石混淆のものである故、その石の分子が淘汰された後の中小企業の生産性は、その固有する優性が高度に發揮されたものと解され、從來の一般的な中小企業低生産性觀は此處に一轉機を劃すべきであらう。

勿論、從來の中小企業一般の生産性は低く、たゞその生産力——自分自身を生産力を組合された生産諸要素の生む生産成果の全體的量と解し生産性とは異なるものとした——が當該企業部門に占むる地位が比較的大であつた點に注目をしてゐたのである。例へば昭和十三年の機械器具工業生産額の約四〇・九パーセントを中小工場生産額が占めてゐることは、その一端を物語るものである。

この低生産性が改善され、しかも總生産力中に占むる地位の輕視し得ぬ場合、良く整備された中小企業が持つ戦力増強への貢獻は、豫想以上に大なるものがあるであらう。

この點、嘗て中小機械工業を「我國國民經濟の現段階の機械工業の生産力増強上、低位なる生産力を持つ中小機械工業を必要とするか否か」課題になるのである」と論じ中小機械工場は概ね勞働力の保健上望ましからざる場所であることが實證されてゐるし、又中小機械工業がその機械生産力に比較して大工業よりも多量の勞働力を濫費してゐると、二點に就て特に「中小機械工業を残存せしむることとは、我國國民經濟の總生産力體系から希望すべきことではないのは勿論、寧ろ不必要であると見られる」と説かれた豊崎稔氏の論旨には充分背ける點はあるが、現在耳にする大工場に於てすらもその保健施設は——外様を誇る割合には決して誇り得るものでない實狀であるといふ巷間の噂を真なりとするならば、氏の批難さるゝ點を國家施策によつて改善する方向に差向けるならば、國家當面の要請に即應すべき性格を有するに至つた中小機械工業として、その生産性の昂進と相伴つて必ずしも氏の論難が現在も妥當であるとは考へられないのである。

生産性に就て、その有する生産力（量）との關聯から決して輕視すべからざる中小企業の次に考へべき課題はその國家的性格のそれである。

中小企業の國家的性格

性格

企業の有する國家的性格、或ひは國家性に就て既に經濟學者側から種々理論的解釋が行はれてゐるが、最も素直に言へば、國家目的達成に參與する企業の役割遂行に於ける當該企業の國家的職能と、解してよいのではなからうか。國營企業の場合は簡單明瞭である。併し私的企業の場合はさうではない。資本制企業經營が利潤を追求することは當然であり、それが國家の必要とする生産——例へば軍需品を行ふてゐても企業利潤の確保が先決問題であつた。だが企業は國家性はそれを抑制するのである。企業は國家の重大目的を達成するため、自己に課せられた職能に於て先づ國家を強化せしめねばならない。

制定せられたる軍需會社法に生産責任制をとつたことはその一つの規定である。『企業は國家性は斯く明白であるが、それが中小企業となると著しく不明瞭である。少くとも中小企業經營者、殊に小企業の場合に於てはさうであり、大企業の下請協力工場として

生産系列に連り、修正される軍需品部分品の生産に従ふ多數の中小企業の中には可成りに自己企業

の國家性——それは大企業に課せられた國家的責務と同様に國家的職能遂行といふ責務——を理解せず、唯時局に乗じて多量の利潤を獲得し得ることを喜び、私的生活に於て肩をひそましむる様な行爲を重ねてゐる者のあることを見聞するのである。勿論大企業、亞大企業の經營者中にも隣人の指彈を受ける様な行爲を耳にすることもあり、必ずしも中小企業經營者のみとは限らぬが、後者の場合はその時局利用的な態度が、殊に著しいことに注目せねばならないのである。

企業經營過程の中から優性經營として残存し、現在の生産力結集といふ國家至高の要請に應ふるために、生産系列中の一通順分子として國家的職能遂行の役割を課せられた中小企業である以上、それ

戦争下の行動原理



藤山愛一郎

東京商工經濟會々頭

『今日爲さなければならぬことは今日の内に片付けること』これは小學校で習ふ平凡な修身の教である。こんな卑近な人生修業がともすれば行はれ悪いことは自分だけのことであらうか。

ゆくりなくも、先だつて讀んだ本の中に迦如上人の言葉として『佛法には明日と申すことあるまじく候』とある。また佛敎は『未來の果を見出し、また佛敎は『未來の果を知らんと欲せば現在の因を見よ』とを教へ、今日の行動と努力の如何

に人生に取つて重大であるかを説き且教へて居るのを讀んだのである。苛烈な戦争に直面して國運を賭くるこの戦ひのさ中にあつて、私達はこの佛敎の教理を味ひ見るもよし、また小學校で習つた平凡な教を思ひ返すもよし、これこそは私達が今肝に銘じ行動に移して爲さねばならぬことである。

『明日と申すことあるまじく候』戦争の行動には明日は無い。如何に疲れたからと言つて、爲す可き攻撃を、明日に延すことは絶対に出来ないことである。行く可き豫定の地もあらう。

『明日と申すことあるまじく候』これはこそ私達の袈裟を脱ぎ去らねばならぬ戦争下の行動原理であり、それはまた人生に對する大きな教理でもある。

はあくまでも大企業が國家に對して生産責任をとる如く、その國家に對する生産責任の一部分を担任し、同時に自己舊來の對企業感をも變換せしめねばならない。

中小企業が國家に對し負ふべき職能的責務を自覺する時は、中小企業が完全に自らを把握し自らの國民經濟的地位を確立する時である。大企業に對する補充條件としての中小企業の國家的重要性が、現在に於けるほど強く表面に現れた時はないのである。

今こそ中小企業は自己固有の優性を活かし、單なる儲け主義でなく國家目的達成への強力なる參與部分として、自己を確立すべき段階である。

もちろん自己確立といふでも自分達だけの獨立を意味するもので

共榮國經濟建設の要

はない。大企業との連環、一つの生産企業系列に於ける生産性高度化による自己確立である。

生産共同體として の企業集團性

戦時生産企業系列はその中核を企業集團制に見ることが出来る。

現在工作機械生産部門に採用されてゐる集團制は、一定地區の製造業者を集團組織とし、中心となるべき工場を責任工場とし、集團



鐵、銅の代 用に鐵木

(ボルネオ)

ボルネオを始めて南方の島々から産出するアラン(鐵木)が最近鐵や銅などに代

つて諸種の器材に用ひられてゐる。これに成功したのは北ボ

ルネオ海軍局の長、ルネオ安全局に着目し、鐵木を利用し

内の他の工場は部品生産を担当しそれを責任工場に集めて組立て、その集團に對し親工場は發注を責任工場に一括して行ふ制度で、そこに生産完成に對する共同責任制も生れ、大企業に於ける責任生産制の一部機構として活用されるのである。

さきに述べた中小企業の國家性は、この企業集團制の採用によつて明確化され、この部分品生産過程に於ける僅かの増れも、生産完

たが成績がよいのでさらに水道の蛇口その他を製作した。これらは鐵や銅よりも簡單につくることができ、耐久力もあり酸化することもない。鉛、洋釘、鋸、鋏なども製作してゐる。鐵木の利用は戦前英領時代にも試みたが、成功しなかつたものである。

鑛業の再編成

(フィリッピン)

日本の戦力増強に寄與すべき比島の各産業のうち、最も期待されてゐる鑛業再編成計畫は戦前鑛産額の八割を占めてゐた金の生産を停止し、重金屬を銅、マンガンに切換へたが、軍政下における血みど

遂の大目的に於ては取り返し得ぬ喰ひ違ひを結果し、國家の要請に背くことゝならざるを得ない。

この一貫せる生産系列の一環としての中小企業の重要性は今後益々その度を加ふることは必然であり、從つて整備されたといへ、大企業に比しては尙歴大な數的優位を占むる中小企業は、その國民經濟に於ける中堅的關係を態々強化せねばならぬ責務を帯ぶるに至つたと考へざるを得ない。

るの努力は獨立比島によつて受けつがれ、重要鑛山の探掘及び日供用量は好成績を示し、銅の如きは生産目標に達せんとする生産実績をあげ、又、マンガンも前年度実績の〇〇倍の好成績を示してゐる。一方、クロムも増産成績も

生産目標を〇割方上廻つてゐる有様で、鐵鑛や鉛鑛の制約にかゝらず現地探掘量、内地向け供出量とも目標の百パーセントといふ成績である。その他、現地供給をめざす石灰及び硫黄の生産も順調で、銅鑛生産の副産物たる鉛の生産額も増へ、ついで、比島の鑛産資源は本格的増産態勢を整へて

以上甚だ簡にして要を盡さぬ憾みはあるが、中小企業は大企業に對して没落の途のみがあると稱された過去の理論は此處に全く變改され、國家政策の助力により適當なる整備を行ひその生産性を昂め、そして大企業との生産過程に於ける緊密な聯關を構成し、共に

國家に對する生産責任を負ふことによつて前途は著るしく開かるゝに至つた。從つてそれは大企業に隸屬すべき關係ではなく生産共同

ゴム製品増産

(セレベス)

西部セレベスにおける敵産ゴムの生ゴム處理方策としては、既に國の生ゴムの液化をはじめ、ゴムタイヤ、チューブ等の本格的製造が計畫され、〇〇會社の工場建設も進んでゐるが一方、簡易ゴム製品

の製造をめざし昨年四月以降ゴム手袋、水囊などを製造中の工場ではすでに月産〇千ダースを製造するに至り現地の各病院や一般の需要に應じてゐるが、ゴム靴、雨具その他のゴム製品も續々製造して市場を開始するに至つた。

體としての誕生であり、程度は大はあれ、共に國家性を深く印刷した生産體として新たに登場するものである。

戦力増強の途に、その斯たな生産責任共同體の部分として力強い發足を示し始めた中小企業は、今こそ自己を知り、そして國家的責務を分担せる榮に自らを鞭撻し、以つて充實堅固なる大道を構築して行かねばならない。私利私欲、以て自ら墓穴を掘るの愚は、嚴に戒むべきであると報告したい。

サザ族の奉仕

(ロンボック島)

敵前建設の最前線ロンボック島に住むサザ族は舊蘭印時代に代表的な意僑民族の烙印を捺されてゐた種族であつたが、今ではわが軍政下にその汚名を全く拂拭して邦人の指導下に一致團結、勤勞建設戦に派がまればかりの努力を續けてゐる。

かくて、〇〇の作業が開始されてから約半年で、鬱蒼たる椰子林は早くも伐開かれ、すでに一〇町歩に及ぶ立派な作業場が完成して、戦力増強に大きな力となつてゐる。

大東亞結合の根柢

文學博士 宇野圓空

東亞十億一致團結の秋

大東亞宣言の五ヶ條に要約された共同の武力、經濟、政治、經濟、文化等に關する全東亞の一體の協力について、これらの諸項目は個々に明はなして考へてはならず、全體として東亞諸民族の解放與隆に向つて推進されねばならぬとは、數日前東條首相の議會に於ける答辭であつた。全く當然な言明である。けだし今の戰爭は總力戰だといふにひながら、武力戰だ經濟戰だ、乃至思想戰だ文化戰だといつては、その名に囚はれてこれらの各項目を個別的に分離して考へるのは、とかく知識人の陥りやすい専門癖であつて、往々それが行政面に於ける各部門の

分離や對立の傾向をすら示すからである。

この意味で大東亞戰爭は特にその建設面に於て民族戰でなくてはならない。民族といふ言葉は屢々人種のことと同義に用ひられるが、民族とは一つの文化共同體だといはれるやうに、それは政治、經濟の外、言語、宗教その他の生活文化を共同にする人類の集團體である。従つて東亞諸民族の協力合同は、これら生活各部門の全面的共同結束なしには實現し得ないのである。共榮圈内に於て人種的差別をしないといふ宣言ですら、實は東亞の民族が人種的に大體同族關係にあり、その間に甚しい區別がないといふ客觀的事實から成立してゐるのではないか。それ故慈愛の昨今の米英の物すごい反響を粉砕して、大東亞の守

りを鐵壁の堅さに築き上げるには、東亞の各國が政治的經濟的に整然たる組織を作り、思想戰、文化戰の陣容を整へ、敵の兵力も謀略も入り込めざるやうに、一致團結することである。しかも其の根本は、東亞の各民族が、心から互に抱き合つて、十億一心、腹の底から燃える火の玉となつて突進する外はない。それには少くともこれまで各民族が、いかに其の精神に於て緊密に結ばれてゐたかを、此の際各自にふり反つて、今一度明確に意識してかゝらねばならない。

血に繋る東亞の民族

滿洲や支那のことは今さら言ふまでもなく、大東亞戰爭が始つてから南方各地に轉戦した皇軍の將

兵が、獨り處で原住民に襲まれ殺はれて居るのは、これに對する我軍の戰慄な、しかも温かい態度によることは勿論であるが、また双方の人種的に極めて近い關係のあることが有力な原因である。

秘自身も大部分ではあるがマラヤからインドネシアの各地を歩き、ことに東地の未開住民の生活を調査した時、どこへ行つてもさうも遠くしやうに原住民達が隔りなく集つて來て、實のところ少しうす氣味悪い事すらあつた。かの野蠻な首狩をやるので有名なボルネオ東地のダイヤク族や、スマトラで本とうに喰人の風習をもつてゐるバタリ族ですら、屢々自分の手を私の手に並べ合せてサマサマといふ。これは同じ皮膚の色から兄弟だといふ心持を言つてゐるのである。正直のところ少々辟易しながらも、またその心根がイヂラしくて、抱いてもやりたい氣持になつたことがある。こんなことは固より彼らと雖もイギリス人やオランダ人に對しては絶対に感じないので、その服制や搾取の政策などは全く知らなくとも、第一人間としての型みが双方から持てなかつたのが事實である。それが今我々

に立脚して來るのは、全く過去に於ける相互の血の繋がり、言ひ換れば人種として大體の系統が同じだからである。

これまで内地で南洋といへば一概に色の黒い人間ばかりがゐるやうに考へられ、椰子の木蔭にアフリカの黒坊のゐる繪など描いて、それが南洋で通つてゐたものであるが、全く馬鹿々々しい話である。勿論人類學的に調査すれば本當の黒人はニューギニア近くには多少残つてゐて、太古は南支那あたりまで擴がつてゐた痕跡もないではないが、現在この南方からずつと支那滿洲にかけて擴つてゐる民族の大部分は、今から四五千年も前にビルマから支那にかけて分布した原東亞人、即ち古い元の東亞人種といふべきものの子孫である。勿論それは長い年代の間に、或はシベリヤ中央アジアから、或はインドの南方にゐた大分系統のちがつた人種と幾らかつて混血して、北と南とその土地によつて多少體質の異つた民族群となつたのであるが、元をいへば中部インドから東は大體に於て同じ血に繋る東亞の民族である。そしてこれが何といつても東亞十億の人間

が、素性といへば同じ血を分けた兄弟であることの歴史的現實であり、この事實が際に出た今度の大戦果の裏に大きな役割を果してゐる。またこの同種同祖、同じ祖先から出た東亞民族であるといふ自覺こそ、十億一體となつて立上る意氣の出立點でもある。

しかしこの同じ腹から出た東亞の兄弟達は、其の後の長い年代をどうして育つて来たか。それはこの廣大な東亞の地域に分散して、交通の不便な時代であつて見れば、土地によつて互に往來も稀になり、またその後は殊さら米、英、蘭等の支配政策のために分割され離間されて、アカの他人のやうに過して来た時代も随分久しかつた。しかしそれにも拘らず東亞の各民族は、たとひ互に離れ々々にはなつてゐても、やつぱり祖先傳來の同じ系統の文化で育てられて来たのである。こゝで文化などといふと餘りに高級なものやうに聞えるが、言語や宗教その他同じ民族生活の様式をもつて、大人のやうな民族も子供のような幼稚なものも、その年齢に応じて伸ばされて来たので、言はゞ一つ親の同じ乳をのんで育成されて來てゐる。これも南方一帯の兄弟とか同胞とかいふことを、サブワとかカスアンなどいつて、同じ種族の乳で育つた人々を意味するが、それを押しひろめていふと、東亞の諸民族は何千年來同じ生活文化の母乳で育つた兄弟である。

東亞を光被する農耕文化

ことにその母乳はこの東亞に獨特な、世界のどこにもない米といふ尊い生命の糧なのである。私はこれまで東亞の農耕文化といふものに付て多少研究も進め二三書きもしたが、たゞ農耕耕作をするといふだけの民族なら、アフリカにもアメリカにも世界の諸地域に多数にあり、歴史的に非常に古いものもあるが、この糧を耕作して米を主食とする民族文化は、全くこの東亞獨自のものである。そしてこの糧を作り米を食ふといふことを中心にして、其の諸民族のあらゆる生活文化の特色が現れるのであるから、これこそ全く東亞民族が寧ろ育てられた尊い母乳なのである。

もつとも滿洲や北支那から西の方、またインドの西部では、昔から異人種との混合が多かつたやうに、殊に文化の上では牧畜を主とする食住の様式やこれに伴ふ南神文化が多分に雜り、しかもその軀幹によつて支那やインドの高級な文化も世界に對して發展したのである。しかし大體に於て其範圍内の諸民族に於ては、ジミではあるが非常に根強い歴史以前の時代から引つゞいての農耕文化が、その後の歴史上の變動にも拘らず今にその根本を支配してゐる。この民族文化は糧の耕作が生活の基本となつて、肉食よりは菜食が主となり、毛皮や毛織の着物よりは麻や木織の植物性の織物を衣料にし、住居は牧畜民のテントとはちがつて、木造家屋に主に兩流の屋根をふいて床を高くしたのが多いといつたやうな生活形式が、糧度が低ければ低いなりに一體的に具はつてゐる。それに東亞諸民族の言語は、元々皆人種が近いだけに、種々多様な種類はあるが、どこかに共通な似たところがあり、日本語から朝鮮、滿洲には北方の要素が強いが、その他は支那語と蒙語族、チベット、ビルマ語、マライ語やジャワ語を代表とするインドネシア語の三系統にまとも

り、何れもカンボヂヤ語に隣つてゐるやうな最も古いモンクメル語といはれるものに繋がつてゐる。しかもこれから引いて學問や藝術、ことに音楽といつた精神文化の方面にまで、たとひ現在幼稚なものであつても、何處かに東亞的の風格が共通に出てゐる。ことに文學即ち歌謡物語となると、我々にも親みの深い羽衣傳説や浦島太郎のやうな話が未開の地にまで行はれてゐて、天地開闢の神話などにも素朴ながらも我々として肯ける節が幾多多い。それは學問や思想といふ整つた形ではなくても、東亞諸民族の世界觀とか信仰の上に同じ源から出たものが多分にあるからである。

かやうな精神文化の共同性格が存在するのは、その根柢として糧を耕作するに東亞の民族はこれを尊い魂を育てる藥として、敬虔な信仰の態度で農耕にいそしんで来たからである。今でも南方の住民達は農耕の神には先祖の神から授かつた尊い種子を齎つて、年の實りになつて各自がいたゞく米のみたま、即ち稻魂を育て上げて行くことを本意としてゐる。だから種まきから種付けから取入は勿論、奥地の山の奥處を作る場合には森を伐開いて、それに火をかけて地ならしする一々の作業にまで何らかの形での祭なり儀式が極めて慎重に行はれる。そしてむしろ種をまくこと草をとることそれ自身が、神に仕へ先祖に奉公する道の實踐となつてゐて、苟にもそれを輕忽な取扱をしては罰が當り、米はできても糧のみたまは實らないと、心の底から今に堅く信じてゐる。

こんな信仰や耕作の仕方は、これを我々日本人の立場から見たら、聖として如何であらうか。それは農耕技術といふ上からいへば隨に未開でもあらうし時代後れの民族からも知れない。しかしその信仰の方面から見ると、その農事に仕へる態度はむしろ我々の太古の傳統のまゝではないか。そして神々への忠實に守つて來て、文字通り神のまに／＼米のみたまを精魂こめて育て上げると同時に、またそのみたまの力で自分らが養はれて行かれて行くといふ氣持は、實は我が農村に於ても古來の種々の行事の中に在りてゐる。